

<特集:台湾で考える日本文学教育>

台湾の高等教育機関における 「日本古典文学」教育の現状と課題

内田康

要旨

学習者の数から見て、高等教育機関での外国語としての日本語教育が盛んな台湾だが、カリキュラムにおいて「文学」関係の科目が設けられている場合でも、「古典文学」に特化した授業を行っている大学は、さほど多くはなく、ほとんどが「日本語文学系」を有するところに限られている。仮に、「文学教育」の内実自体に対する問いを暫く措くとしても、「古典文学」の教育がその一翼を担うものであることは認めても差し支えあるまい。それでは、現場の当該科目担当教員は、学生たちに何を求め、また学生たちはそれにどう応えているのだろうか。こうした問題は、これまで例えば輔仁大学での実践例などが報告されてはきたものの、台湾全体の状況に関しては、その実態が必ずしも明らかにされてこなかった。そこで本稿では、台湾の各大学において今現在「日本古典文学」の授業を開講中の教員を訪問してインタビューを行い、教学の場の現状およびそこでの課題を整理した上で、台湾の高等教育機関が今後「日本古典文学」の教育に取り組んでいくべき方向について、具体的に検討してみたい。

キーワード:台湾の大学、「日本古典文学」教育、教員への聞き取り調査、古典文法教育、「文化」としての「古典」

1 はじめに

本稿は、今回の特集「日本語教育の中の『日本文学教育』を考える」に即して、特に、台湾の高等教育機関で「日本古典文学」の教育が如何になされ、また今後なされるべきかを検討するものである。最初に幾つかの前提を確認したい。「日本語教育の中の『日本文学教育』とい

う表題の中に見られる二つの「日本」。それは、学習者に「教育」すべき内容としての「日本語」と「日本文学」を指すわけだが、この二重の〈縛り〉の齎す意味は、とりわけ「日本古典文学」教育の場合、さらに重さを増すかのように見受けられる。

まず、「日本語教育」の一環としての「日本文学教育」という観点に立つなら、そこには多かれ少なかれ、「日本語学習」との相関の度合という問題が入り込んでこよう。元来様々な言語で書かれた文学作品を、翻訳を通してそれなりに楽しめることを思えば、「日本文学」への「理解」を「日本語」の理解と切り離して考える、というのも充分可能なはずである。たとえそれが、読者によって翻訳的に想像された「日本文学」であったとしても、自らの日常使用言語を通じての「外国文学」の「理解」が、その対象理解の一形態であることは否定できない。けれども「日本語教育の中の」ということになると、そこでの「日本文学」は、「日本語」を学習するための手段の一つとして、必然的に原文による読解が求められることになる。とはいえ、学習者にとって、原文が彼らの学ぶ「日本語」とは大いに異なる「古典文学」の場合、「言葉の壁」はいっそう高さを増す。日常的に使われる「日本語」の習得を目的とした「日本語教育」では、所謂「古文」の学習は、基本的に想定外である。日本はもとより、世界の様々な国や地域での「文学」研究・教育の領域には、多く「古典文学」が組み込まれているわけだが、「日本古典文学」も「日本文学」の一環として「教育」されうるのであれば、それは「日本語教育の中」で果たして如何に位置づけられるのか。もちろん、ここで言う「日本語教育」を、単にカリキュラムの名称としてのみ捉えるなら、如上の点は必ずしも問題にならないかもしれないが、ひとまずそうした可能性をも含めた上で、「日本語教育の中の」という前提に注意を払っておくことにしよう。

続いて、仮に論点を「日本語教育の中の『文学教育』」の一環として「日本文学」の教育を考える、というふうに把握した場合を想定してみると、こんどは、その「日本文学」の〈範囲〉が、あらためて問題となってくる。日本の国語教科書に収められた「文学」関係の教材を考えても、小説にせよ詩にせよ、外国作品の翻訳は少なくない。これらの立派に「日本語」へと生まれ変わった翻訳テキストを、「文学教育」のために「日本語教育」の場で活用することは十分ありえようが、それは「日本文学」の教育としてどこまで認められるのだろうか。そして就中「古典文学」に話を絞るならば、前近代の日本において「古典」と見なされた作品は、現在で言うところの「中国文学」のテキストをも大量に含んでいた。また、そもそも「古典」には、近代以降の「文学」概念を用いた場合、和文漢文を問わず、そこから抜け落ちてしまう作品も多く、さらにこの意味で

の「文学」への拘りは、近代的な制度としての所謂カノンの、無自覚な踏襲にも結びつきかねない。即ち、「日本」「古典」「文学」のどれをとっても、「教育」に際して真っ先に問題となるであろう「何を」「どのように」教えるかをめぐっては、自明のものなど一つもないと言うほかないのである¹。

こうした幾重もの困難にもかかわらず、ここ台湾でも、「日本古典文学」の授業を開講している大学は何校か存在する。では、各大学の現場においては一体どのような授業が行われ、また教師たちはそれぞれ如何なる問題に直面しているのだろうか。本稿は、かかる点を台湾の日本語教育をめぐる大状況の中で捉え、そこから当地の「日本古典文学」教育が将来にわたって目指すべき方向を模索するため、以下、順を追って論じていこうと思う。

2 台湾における日本語教育および「日本古典文学」教育をめぐる現状

台湾における日本語学習者をめぐる現状に関しては、2010年8月に発行され、目下最新の実情を反映していると考えられる『2009年度 台湾における日本語教育事情調査報告書』（財団法人交流協会）を参考に²。本『報告書』によれば、2010年4月時点での台湾の総人口が23,133,074人であるのに対して、日本語学習者数は247,641人、単純計算の上で「93.4人に一人が日本語を学習しているということになり、「この数値は韓国、オーストラリアに次ぐ世界第三位の高さとなっている」³。また、その学習者数は「全体の約半数が高等教育機関に属している」⁴点も特徴であり、具体的に言えば、初等・中等教育併せて32.1%、学校教育以外19.5%に対して、高等教育は48.4%の119,898名に達し⁵、さらにそのうちの84.6%が、日本語が専攻ではない学生だという⁶。一方、残りの15.4%に当たる日本語専攻者は全18,505名で、これら日本語学習者のうちの一定の人数が、大学等で、「古典」を含めた「日本文学」に関する授業

1 この他、「文学教育」それ自体が孕む(不)可能性をめぐっても大いに議論の余地があろうが、煩雑を避け、本稿では敢えて深くは踏み込まなかった。また、所謂カノンの扱いに関しては、稿末で若干触れる。

2 以下、『報告書』。調査期間は2009年9月～2010年4月(6頁)。交流協会ホームページでも閲覧可能。

3 『報告書』12頁。

4 『報告書』23頁。

5 『報告書』9～10頁。高等教育以外の人数の内訳は、本稿表1に示したとおり、初等 2,440名、中等 77,139名、学校教育以外 48,164名である。

6 『報告書』12頁。人数の内訳は、高等教育全体の119,898名のうち101,393名にのぼる。

履修の機会を持っていると考えられる。もちろん、学生に限らず日本語の学習未経験者でも、翻訳書を通して「日本文学」に接している可能性は大いにあるわけだが、日文専攻コースに焦点を絞った本稿の趣旨に従い、当面の調査の対象からは除外する。

さて、このように台湾では、学習者数から見て高等教育機関での外国語としての日本語教育が盛んであると、ひとまず言えるわけだが、カリキュラムの上で「文学」関係の科目が設けられている場合であっても、「古典文学」に特化した授業を行っている大学はさほど多くはなく、ほとんどが「日本語文学系」を有するところに限られている。その状況を見ていくにあたって参考になるのが、2003年度のデータを整理した楊(2004)である。そこで次に、同年度の日本語学習者の状況を、2009年度のデータと対比しつつ併せて示そう。『報告書』によれば2003年度の日本語学習者数は128,641名(初等教育は含まず)で、そのうちの58.5%にあたる75,242名が高等教育での学習者である⁷。したがって数字の上では全体でも倍近く、また高等教育に限った場合も59.3%の伸びを示しており、現在と同列に論じられないのは確かだが、むしろだからこそ、後述する「日本古典文学」教育をめぐる問題の、当時と今とを比較した上での把握が、可能になるものと思われる。

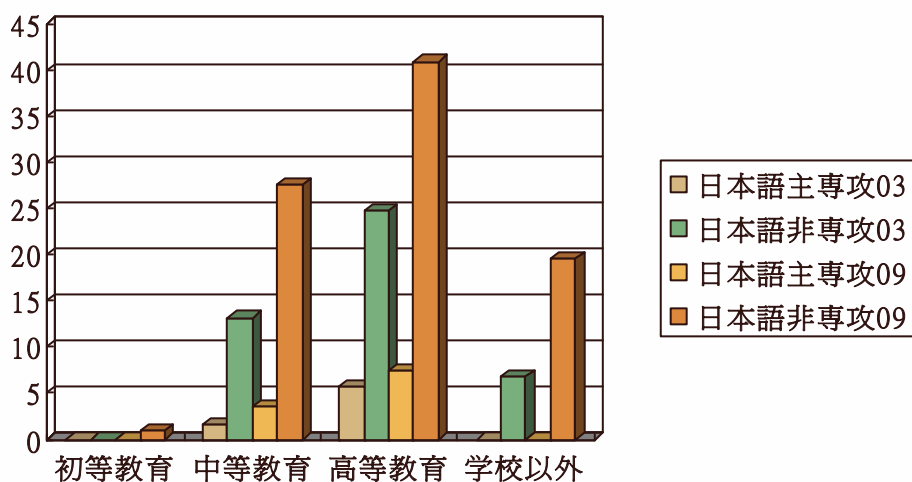
表1 台湾における2003年度および2009年度の日本語学習者数

	2003年度	2009年度	03年度比
日本語学習者数	128,641 人	247,641 人	<+92.5% >
初等教育機関		2,440 人 (0.9%)	
中等教育機関	36,597 人(28.4%)	77,139 人 (31.2%)	<+110.8%>
高等教育機関	75,242 人(58.5%)	119,898 人(48.4%)	<+59.3% >
学校教育以外	16,802 人(13.1%)	48,164 人 (19.5%)	<+186.6%>

因みにこれらの学習者を、中等教育機関および高等教育機関において示される日本語の主専攻者と非専攻者の区別も考慮してグラフにすると、以下のようなになる⁸。(縦の単位は%)これをパーセンテージのみ示すと、2009年度の中等教育機関31.2%のうち、主専攻3.5%に非

7 『報告書』8～10頁。

8 2003年度のデータは、交流協会のホームページを参照した上で、2009年度の人数を基準に数値を改めた。



専攻 27.6%、高等教育機関 48.4%のうち、主専攻 7.5%に非専攻 40.9%。また、2003年度の中等教育機関 28.4%のうち、主専攻 3.1%に非専攻 25.4%、高等教育機関 58.5%のうち、主専攻 10.9%に非専攻 47.5%だが、これを2009年度の人数を基準にして数値換算すると、中等教育機関は主専攻 1.6%に非専攻 13.2%、高等教育機関は主専攻 5.7%に非専攻 24.7%という結果であり⁹、中等教育・高等教育いずれも、主専攻者に比べて非専攻者の増加の著しさが確認できる。学習者数の急激とも言える伸びは、2009年度調査における調査対象の拡大によるもので、必ずしも実態を反映しているわけではないようだが、大凡の傾向は、ほぼこの通りであろう。続いて、楊(2004)からの引用を示す。

表2(2003年度 台湾の高等教育機関における〈日本古典文学教育〉の概観)

番号	大学名(学科名)	科目名(大学院)	選択/必修	教師の国籍
1	文化大学(日本語文学系)	日本古典文学(日本古典文学研究)	選択	日本
2	東呉大学(日本語文学系)	日本古典文学(日本古典文学研究)	選択	日本(台湾)
3	輔仁大学(日本語文学系)	日本古典文学(平安朝物語文学研究・日本中世文学専題研究)	必修	台湾
4	台湾大学(日本語文学系)	日本古典文学選読(日本近世文学研究)	必修	台湾
5	東海大学(日本語文学系)	日本古典文学(91)・日本古典表象文化論	選択	日本
6	静宜大学(日本語文学系)	日本古典文学史、日本古典名著選読	選択	台湾

⁹ 学校教育以外の 13.1%は、同じく換算すると 6.8%となる。

7	世新大学(日本語文学系)	日本古典文学〈予定〉 (1年後)	必修	未定
8	慈済大学(東方語文学系)	日本古典文学選読	選択	日本
9	大葉大学(応用日語系)	日本古典文学選読、日本古典戯曲講座	選択	日本
10	義守大学(応用日語系)	日本古典文学〈予定〉 (2年後)	選択	未定

「日本語文学系」のある大学は10校(実際には「世新大学」を入れて11校)、「応用日語学系」のある大学は17、「東方語文学系」は1校で、計28校(「世新大学」を入れて29校)ある。この中には、「技術学院」や「科技大学」の「応用外語学系日文組」は含まれていない。調査によると、この28校^(ママ)の中で「日本古典文学」や「日本古典文学研究」の科目を設けている大学は、上表に記されているとおりで、10校となっている。つまり、「日本語文学系」(1~7番)は7校、「東方語文学系」(8番)は1校、そして「応用日語学系」(9~10番)は、2校である。そして、日本交流協会2003年9月20日発行の「いろは」によると、大学院を持つ大学は9校であり、古典文学関係の講座が開講されているのは4校である(表の1~4の大学)。また、必修科目として開講されているのは3校(3、4、7。ただし、7は一年後の開講予定)である。だが、古典文学という科目名で講座は開講されていなくても、淡江大学の場合は「日本名著選読」というような講座のなかで、古典文学が取り上げられているので、ここに出ていない科目名でも古典教育が行われている可能性がある¹⁰。

この8年前の論考は、当時の台湾の大学における「日本古典文学」教育の実態を提示し、さらに調査者自身の勤務校である輔仁大学日本語文学系での同名科目の実践を詳細に報告したもので、大いに参考になる。これと関連して、輔仁大学における「日本古典文学」の教育実践については、他に楊・林(2010)ならびに中村・頼・張・楊(2010)などの成果も報告されており、稿者にとっても資するところ大であった¹¹。こうした先行調査を踏まえ、本稿では、現時点において台湾全体で「日本古典文学」の授業を開講している大学の担当教員一人一人を訪問、日本語によるインタビューを行い、その結果を整理した上で、台湾の高等教育機関が目下「日本古

10 楊(2004)「日本古典文学教育の可能性」21~22頁。ただし一部の漢数字をアラビア数字に改めた。

11 楊・林(2010)「《日本古典文學》教學中的跨文化(交流)實踐」および中村・頼・張・楊(2010)「日本語の理解者から日本語の生成者へ」。

典文学」をどのように「教育」しているのか、現状を具体的に示しつつ、そこから浮かび上がってくる問題点や今後の課題について考えてみたい。

3 台湾の大学における「日本古典文学」教育に関するインタビュー調査結果

はじめに、現在台湾の高等教育機関において「日本古典」という文字が冠せられた授業の開講されているところを、事前の調査ならびにインタビュー結果をもとにまとめてみる¹²。

表3(2009年度 台湾の高等教育機関における〈日本古典文学教育〉の概観)

番号	大学名(学科名)	科目名	選択/必修	受講者概数	教師の母国語
1	東興大学(日本語文学系)	日本古典文学、日本古典文学史	選択	40名前後	中国語、日本語
2	輔仁大学(日本語文学系)	日本古典文学	選択	30名前後	中国語
3	国立政治大学(日本語文学系)	日本古典文法	選択	15名前後	中国語
4	国立台湾大学(日本語文学系)	日本古典文学選読	必修	70名程度	中国語
5	東海大学(日本語文学系)	日本古典表象文化論	選択	50名程度	日本語
6	静宜大学(日本語文学系)	日本古典名著選読、日本古典文学史	選択	50名程度	日本語(中国語)
7	世新大学(日本語文学系)	日本古典文学	選択	15~20名	日本語
8	慈濟大学(東方語文学系)	日本古典文学選読	選択	10名前後	日本語
9	大葉大学(応用日語学系)	日本古典戯曲	選択	40名前後	日本語

上記『報告書』に掲載された台湾の165の高等教育機関のうち、「日本語専攻学科」の存在が認定されているのは、四分の一強の全43校である¹³。さらに、そのまた四分の一にあたる11校に「日本語文学系」があるというのは、楊(2004)の時点と変わっていない(ただし高雄市の文藻外語學院の場合、名称は「日本語文系」)。だがその内訳を見ると、国立政治大学が加わった一方、中国文化大学と義守大学において当該科目が開講されなくなっている。もっともこの2

12 2009年度と2010年度では、担当教師に若干の入れ替わりはあるものの、科目上の変更は見られない。

13 『報告書』88~108頁。

校では大学院における「日本古典文学研究」は開かれており、それを含めて東呉・輔仁・政治・台湾の併せて6校の大学院に、「日本古典文学」の科目が存在している¹⁴。本来であれば、こうした大学院での「日本古典文学」教育の現状も詳細に検討すべきであるが、今回はほぼ基本的に、より広汎な学習者に対して開かれていると考えられる大学部での教育の実態報告に止める。さらに、「日本古典文学」との関わりが想定される「日本文学史」の授業に関しては、上の表3に示された東呉大学と静宜大学のように、近代文学史のほかに古典文学史に特化した科目を開いている2校以外にも、この表に載せていない教育機関を含めて多く開講が確認されたが、本調査では、問題点を絞り込むため、古典作品の読解に重きを置いた授業に注目し、「日本文学史」については基本的に取り扱わないこととした。また、大葉大学の「日本古典戯曲」は、この表で唯一の応用日語学系で開講されているのみならず、特に「古典戯曲」に特化しているという点でも極めてユニークなものであるが、授業担当の方に連絡を取り、メールと大学のシラバスにて内容を確認したところ、三年生後期の選択科目である当該授業は、「雅楽、能、狂言、浄瑠璃、歌舞伎など日本古典芸能、演劇を中心としながら、それらの視聴覚資料をふんだんに用い、広い視野から日本古典芸能の全体像を掴むことを目標とする」「内容は日本芸能史の名称がそれに最も近い」¹⁵ものだとのことであったため、インタビューは行わなかった。したがって、今回の聞き取り調査は、表3の1から8までの合計8校において「日本古典文学」の授業を御担当の方々を対象とすることとなった。次にお名前を掲げ、貴重な時間を割いて調査に御協力くださった先生方にあらためて感謝の意を表したい。東呉大学(呉)黄智暉助理教授、輔仁大学(輔)楊錦昌副教授、国立政治大学(政)鄭家瑜助理教授、国立台湾大学(台)朱秋而副教授、東海大学(海)大西仁助理教授、静宜大学(静)柳瀬善治助理教授、世新大学(世)内野静香助理教授、慈濟大学(慈)岡部明日香助理教授、である¹⁶。インタビューは、2011年の3月初旬から5月初旬までの約2ヶ月間にわたって断続的に行った。また、聞き取りには赴かなかったものの、メールのやり取り等で貴重な情報をお寄せいただいた、大葉大学の小俣喜久雄副教授、中国文化大学の齋藤正志副教授、義守大学の中尾真樹助理教授、輔仁大学の

14 さらに本 100 年度より、静宜大学と慈濟大学でも大学院で「日本古典文学」の授業が開かれるようになった由である。

15 ネット上で公開されている、大葉大学 99 學年度第2學期應用日語學系3年1班系課程綱要による。

16 この他に輔仁大学夜間(進修)部でも張蓉蓓助理教授による「日本古典文学」が開講されている。その授業実践は中村・頼・張・楊(2010)で詳細に報告されているため、今回はインタビューを行わなかった。

張蓉蓓助理教授、淡江大学の曾秋桂教授と彭春陽副教授にも、この場を借りて厚く御礼申し上げたい¹⁷。以下、聞き取りに基く各大学の状況に関する論述中の大学名は上記の()で示した略称を用いることとする。内容は2010年度(民国 99 学年度/2010年8月~2011年7月)における授業状況であって、前2009年度と比べ担当教員に若干の入れ替わりはあるものの、カリキュラム上の具体的な変更はない¹⁸。インタビューは、次のような項目について、基本的にこの順で質問をし、話の流れによって多少前後した場合もあったが、最終段階で内容ごとにまとめを施した。

- ①担当教員の母国語
- ②担当教員の専門
- ③開講学年および学期
- ④選択か必修か、および毎学期の受講者概数について
- ⑤授業形態および評価について
- ⑥教材について
- ⑦古典文法教育の重視の度合
- ⑧作品の原文に対して、現代日本語訳や(現代)中国語訳を使用することへの考え
- ⑨「日本古典文学」の、科目としての位置づけについて
- ⑩学生たちの反応について
- ⑪授業に対する工夫ならびに問題点について
- ⑫他の授業との連携について

それでは続いて、各事項の結果を整理しつつ提示していこう。

- ①担当教員の母国語

17 稿者の勤務する淡江大学では、先に引用した楊(2004)にあったように、現在「日本古典」を冠した授業こそないものの、「日本名著選読」という授業(必修科目)の中で古典の読解が行われる場合がある。

18 静宜大学では陳斐寧助理教授から柳瀬善治助理教授へ臨時に、また慈濟大学では離職した稿者内田から岡部明日香助理教授へ、それぞれ担当が替わり、そのため授業内容には変化が生じたと推測される。

中国語:(呉)(輔)(政)(台)／日本語:(海)(静)(世)(慈)

この点は、授業における使用言語とも関わってくる。母語および母国語を日本語とする教師は、95%以上ほぼ100%日本語で授業を行っている。一方、母国語が中国語である教師のうち3名は母語を閩南語とするが、授業では半々((呉)(輔))もしくは70%((政))を中国語(北京語)によって説明しているという場合もあれば、80%以上は日本語であとは中国語での説明((台))という場合など、区々であった。だが中国語を母国語とする教師は、多かれ少なかれ中国語を交えた授業を行っており、(呉)のように、最初100%日本語で行っていたのを、学生からの要望で50%に切り替えたという例もあって、学生の理解度に影響が及ぶことは確かであろう。なお(呉)の場合、「日本古典文学史」は日本語を母語とする教師が全て日本語で授業しているとのことである。

②担当教員の専門

日本古典文学:(呉)(輔)(政)(台)(世)(慈)／日本近代文学:(海)(静)

担当は、やはり日本古典文学を専門としている教員が多く、内訳としては、近世の読本(呉)、中世の軍記と説話(輔)、記紀万葉など上代(政)、近世の和歌(台)、中世の和歌(世)、平安の物語(慈)と様々で、またそのほとんどが、中国文学との比較を視野に入れた研究者である。さらに(静)の場合は、本来の担当者である平安文学専門の陳斐寧助理教授が産児・育児休暇のため、近代専門の柳瀬助理教授が臨時に代講された由であった¹⁹。

③開講学年および学期

・4年次に通年で各学期2単位ずつ:(呉)(輔)(台)(海)(静)(世)(慈)

・修士1年次に通年で各学期2単位ずつ(ただし受講者の多くは大学3年生):(政)

ほとんどの大学が4年次に通年で各学期2単位ずつの授業となっている中、(政)の場合のみ状況が異なっている点は補足説明の必要がある。「日本古典文法」という科目名からも明らかのように、これは日本の文化や歴史に関わる教学研究に力を入れている(政)で、必ずしも

19 なお閩南語を母語とする陳助理教授は、説明部分のほとんどに原則として中国語を用いていたという。

文学作品に限定されない古文献資料の読解訓練のために²⁰、もともと大学3年生の授業として「日本古典讀解」の名称で開かれたものだったが、古典文法を知らずに大学院へ入学してくる学生にも単位が取れるようにと、去る98学年度より修士課程の科目に変更されたものの、実質的には15～20名の受講者のうちの10名前後は大学3年生が履修しているとのことである。後で取り上げる古典文法の教学という問題と絡んで注目に値しよう。

④選択か必修か、および毎学期の受講者概数について(⇒表3を参照)

かつて2～3校で必修科目とされていた「日本古典文学」も、現在では(台)を除いて全て選択科目となっている。これは、必修科目を極力減らす方向にある台湾教育界の動向を反映したものであろう。受講者数については、各大学で一学年の人数が異なるために、単純な比較は無意味だが、概ね当該学年の三分の一から四分の一の学生が履修している。

⑤授業形態および評価について

文法に特化した(政)はもとより(海)や(静)のように、ほぼ100%講義形式のところもあるが、その他の大学では多かれ少なかれ学生によるグループ発表等も取り入れられている。その場合、評価のパーセンテージは概ね20%くらいであり、中国語で発表((世))させるところもあれば、可能な限り日本語での発表を求める((呉)(輔))ところもある。また(台)では、前期は文法中心に100%講義、後期は逆に大部分をグループ発表に費やし、評価も口頭発表50%に期末レポート30%、特に準備段階で、教師が学生をきめ細かく指導しているとのこと、必修科目である上に人数の多さからして、教師の負担は並大抵ではなかろうが、学生達はほとんど期待に答えてくれているという。その他、30～40%の定期テスト以外に、文法に関する小テストを行って平常点に加算している大学も多く、さらに、何らかのトピックに特化したミニレポートを課している大学((世)(慈))もあった。他にもユニークなところでは、短歌創作((輔)(世))や²¹、古典作品に基く創作演劇の上演((世))なども行われており、学生の学習意欲の向上に一定の成果が認められたとのことである。

20 ただし実際に授業で扱う原文は、『万葉集』『古今集』『竹取物語』『土佐日記』『源氏物語』『平家物語』『徒然草』等、ほとんどが「日本古典文学」の領域に属するとされるテキストだとのことである。

21 輔仁大学における試みに関しては、楊・林(2010)および中村・頼・張・楊(2010)を参照。

⑥教材について

具体的な作品としては、『日本霊異記』や『今昔物語集』等の説話、あるいは『雨月物語』のような読本を、まとまった内容でかつ長さが手頃という理由で取り上げているところが幾つか見られた((呉)(輔)(海))。一方、『竹取物語』や『伊勢物語』に始まり、多くの作品をできるだけ偏らずに幅広く取り上げようという志向性を持ったところもある((輔)(台)(世))。また、韻文作品として、日本でも中学や高校等で扱われることの多い『小倉百人一首』に、一定時間を割いているところもある((輔)(世)(慈))。他に、『舞姫』等、明治以降の作品でも、古文で書かれているということで、積極的に取り上げている大学も目立つ((呉)(静)(慈))。さらに(静)の場合、「日本古典名著選読」という科目名に拘って、本居宣長の著作のような思想的なテキストも、敢えて扱っているとのことであった。

以上のような作品を取り上げるにあたり、ほとんどの教師は、本文のみ²²、もしくは注釈や現代語訳をも含んだテキスト(小学館の(新編)日本古典文学全集や、角川ビギナーズクラシック等)を適宜配布しているが、浜島書店の『新訂最新国語便覧』((輔))とか文英堂の『新日本文学史』((静))といったような、国語便覧や文学史の教科書をも用いているところもある。特に便覧は、写真や図版の多さが学習者の意欲を刺激する効果があるほか、基本的な古典文法の参照にも便利だという。文法教材に関しては、『対訳古典文法』(第一学習社)のように日本で出版されているものを使っている大学((呉))も、また、『口語対照日語文語文法』(鴻儒堂)のように台湾で出版されたものを使用している大学((慈))もあるが、その一方、台湾人学習者に適した文法の教科書がないという理由から、基本的に教師が作成した教材をパワーポイントを用いて説明している((政))、との声も聞かれた。

⑦古典文法教育の重視の度合

古典文法に特化した(政)に限らず、それ以外でも、特に上学期の50%程度((呉)(輔)(海)(慈))乃至それ以上((台))を、古典文法の解説に費やすというところは多かったが、一方で、学習者の理解の混乱への恐れから、あまり文法を重視しない((静)(世))という意見もあった。(政)でなくとも、文法の重視を心掛ける教員は皆、学生達に、「文学」の理解以前の問題として、

22 あるいは Word で作成した原文ファイルを Moodle にアップし、各自プリントアウトさせる((海))等。

古文読解能力を身に付けてほしいと望んでいる。程度の差こそあれ、この点に、「日本古典文学」教育が、主に近現代の日本語で書かれたテキストを扱うことを前提とした他の「日本文学」教育とは異なった問題を有しているのは、間違いない。これを追求していくと、本特集の中心テーマから逸れてしまう可能性もあるが、あるいは逆に〈「日本文学」教育〉という主題自体を相対化するためにも、それを検討することの意義について注意を喚起したい。例えば、教師から発せられた次のような〈迷い〉の声には、大いに耳を傾ける必要がある。「日本では中学から学習が始まる古典文法を、台湾の大学生がほぼ1年間で学ぼうというのは限界がある。かといって、全体が文法の授業になってしまうのも、「文学」の授業としては考えものだ。自分は以前、「文法の知識がなければ鑑賞はありえない」と考え、上学期の授業では文法学習の必要性を訴えてきたが、とかく学生達は、そこに困難を覚え、文法に時間を費やすよりも、直接古典文学の鑑賞に入りたがる。こうした認識のズレから、下学期では、より内容重視に切り替えた」²³ ((呉))。

⑧作品の原文に対して、現代日本語訳や(現代)中国語訳を使用することへの考え²⁴

今回聞き取りを行った全ての教員は、「日本古典文学」という科目の意義として〈原文の読解〉を中心に考えているが、現代日本語訳の併用については、「テストでは現代日本語訳をさせるが、授業では基本的に使わない」((政))、「あまり好ましくない」((世))、「やむをえない」((呉)(静))等の意見から、「あくまで学生が各自参照するのに使用」((台))、「意味の理解に必要」((海)(慈))、「現代語訳の参照も日本語の勉強の一つ」((輔))などと、ある程度見解に幅があった。外国語学習における媒介語の使用は珍しいことではなく、特に学習者が日本語の古文という〈新たな外国語〉を学ぶに際し、それに近い現代の日本語を媒介にして理解しようとするのは、ごく自然だろう。とりわけ(輔)では古文の学習が現代の日本語を理解する上でも大いに助けになる点を強調しているという。ここでも、「文学」というより「日本語」の学習の一環としての「日本古典文学」教育、という側面が浮上してくる。この点は、古典作品を授業で取り上げる上での中国語訳の扱い、という問題とも連動しており、「使わない方が望ましいが、大学3年生が中心の場合、中国語による説明も仕方がない」((政))、「あまり望ましくないものの、禁止の

23 インタビューの内容に、稿者が整理を施した。

24 古典教育への訳文の使用に関しては、井上(1997)「外国人への古典指導」177頁を参照。

しようがない((呉)(世))、「自分で探して参考にする分には構わない」((静)(慈))、「あえて授業で積極的には取り上げないが、中国語訳の存在は紹介して比較に対する関心を促す」((輔)(台))、「原文の意味を取るのに労力を割かせないため、導入検討の余地がある」((海))といった具合に、教師の姿勢も様々である。現代の日本語訳にせよ中国語訳にせよ、〈原文の読解〉に主眼を置く限り、それはあくまでも二次的なものにならざるをえまい。けれども仮にポイントをずらし、文法学習から離れたところで、ある程度信頼できる翻訳に頼ることができるなら、例えば「(日本)文学教育」に対する別のアプローチにもなりうるのではないか。これも、前項とはまた違った方向から〈「日本文学」教育〉を相対化する一つの試みとなろう。

⑨「日本古典文学」の、科目としての位置づけについて

各大学におけるカリキュラムの違いによって当該科目の位置づけが多少異なるのは当然であるが、あえて大まかにまとめるなら、

A:日本語に対する理解の向上

B:日本文化に対する理解の向上

C:古典文学作品の鑑賞法

という三つがポイントとなろう。

まずAについては、どの大学でも多かれ少なかれ、所謂「古典文法」の学習を意識しており、それは「様々な分野の日本語文献を読むにあたっての重要な道具」((政))として、その学び自体を授業の目的にしているところに限るものではない。前項⑧で述べたように、ほとんどの教師が〈原文の読解〉を授業の中心的意義として考えている以上、十分に予測される結果だろう。ただし一方で、「文学」の授業という看板を掲げながら文法学習に傾き過ぎることへの疑問も教師に存在している例((呉))は、⑦の項目で見たとおりである。そうした中、(輔)では日本の古文と現代文との繋がりを重視し、前項⑧でも触れたように、現代の日本語を理解するための古文学習という側面を最も強く打ち出している²⁵。のみならず台湾に残されている日本時代の文語文献資料を理解できる人材の育成にも自覚的であり、この点は(政)の他、当時の日本語

25 現代の日本や日本語との接点の強調を心掛けている、という意見は(台)でも聞かれた。

で書かれた資料である『蕃族調査報告書』²⁶を読解教材に使用している(慈)の場合にも言える。これらは学習目的の明確化のために重要だろう。

続いてBについては、日本語学習者の「日本文化」に対する関心というニーズにもある程度応えうるものと言えよう。『報告書』によれば²⁷、日本語学習者の学習目的のうち特に突出した「日本語への興味」「日本文化知識」に関して、初等・中等教育、高等教育、学校教育以外のそれぞれの数値が、前者がそれぞれ 75.5%、73.1%、68.5%であるのに対し、後者では 68.8%、78.8%、53.2%と、大多数を占める高等教育の場での学習者において、他の二者と異なり、「日本文化」への関心が、僅かながら上回っている。とりわけ(輔)(政)(台)などでは、先のAと関連して、「日本文化を理解するためにこそ、古文の読解能力が必要」との見解が強く窺われた。また一方、言語的学習以外の側面では、歴史的に形成されてきた「日本文化(表象)」を対象化することの意義の強調((海)(静))、あるいは中国文学・文化との交流ならびに比較の視点の導入((慈))等の意見が、特に注目される。

さらにCについて、この点が特に言及されたのが(呉)のみだったのは、「文学」の授業であるからには言わずもがなだ、という認識が教師にあったという可能性もあるが、片や「文法」や「文化」が強く意識されていることからすると、「日本古典文学」の授業では、一体どこまで、そして如何に「文学」の教育に踏み込み得るのか、という極めて根本的な問題がここに内在しているとも言えよう。逆に、「日本古典文法」の授業である(政)から、「文学教育は〈鑑賞〉が目標であるが、その意味でこれは文学のための授業ではない」との意見が出されたことは、〈「日本古典文学」教育〉の範囲を考えるうえでも意義深い。

「文法」にせよ「文化」にせよ、学生への新たな知識の注入という面がどうしても多くなってしまふのは、「日本古典文学」という科目において避けがたい。けれどもそうした中で、学習者の思考力の向上という点を強調した意見もあった((輔)(台)(海))²⁸。現代語との比較を通した言語的側面であれ、また何らかのテーマ設定に基いた思考的側面であれ、それらはいずれも様々な〈「日本古典文学」教育〉の可能性を秘めているものと思われる。

26 佐山融吉『蕃族調査報告書』(臨時臺灣舊慣調査會第一部、臺灣總督府蕃族調査會、1913～1921年)。

27 『報告書』20～21頁。

28 (海)では、「紀行」「異界」などと、学期ごとに設けられたテーマに沿って講義が行われているという。

⑩学生たちの反応について

先に⑦でも触れた古典文法の難しさは、ほとんどの大学の学生が口にするようで、文法学習よりも作品の鑑賞((呉))や文化形態の説明((静))についての学生の反応のよさも指摘された。だがその一方で、新しい知識に触れる意欲を示したり((海)(慈))、日本語への理解の深まりを喜んだり((輔)(政))、という学習者の存在に言及する意見もあった。

⑪授業に対する工夫ならびに問題点について

文法学習に対する学生の意欲の低さについては、特に多くの教師が頭を悩ませている。如何に学習者の関心を高めるか、そのための工夫として、「我は海の子」「野ばら²⁹」などの歌詞を音声とともに紹介する((呉)(輔)(台))、授業のホームページや Moodle 等を利用して学生とのコミュニケーションを密にする((輔)(海))、グループ発表の準備に際して個別指導に努める((台))、中国文学や日本近代文学と関わりのある古典作品を取り上げる((呉)(慈))、といった試みのほか、全ての教師が、多少の差はあるものの画像や映像の使用を心掛けている。だが、とりわけ映像の扱いに関しては、原作の内容との乖離やイメージが限定されてしまうことへの懸念((海))、さらに、あくまでも言語を通しての抽象的理解に拘るべきであるとの見解((台))にも、十分に耳を傾ける必要があるだろう。

⑫他の授業との連携について

いかなる授業であれ、他の科目との相互関連に基いてこそ、学習者の能力の向上をより図ることができよう。「日本古典文学」の場合、現代日本語文法、日本文学史、名著選読といった授業との繋がりが想定できる。(静)のように、各学期末に「文学」をはじめとする教員同士の分科会が開かれ、意見交換の場があれば理想的だろう。また仮にそうした場がなくても、学科内の各教員が個人的レベルで情報をやり取りしたり、あるいは一人の教師が相互に関連のある科目を担当(例えば「日本古典文学」と「日本文学史」)しているなら、授業同士の連携も行われ得るだろう。ただし、「これらの授業が各大学で選択科目化してきている現在、学生に関連する科目をともに全て履修することを求めるのは難しい」((呉))。台湾で日本語を専攻する学

29 2008年公開の映画『海角七號』でも使われたことから、台湾の学生にとっては馴染みがある。

生にとって、「日本古典(文学)」との関わりで必ず修めるべき学習内容とは何か。今後とも、あくまでも当地に即したかたちでの検討が求められる。

4 まとめ

インタビューを終えて、それぞれの学科で異なる状況の中、様々な工夫を凝らしながら日々苦闘される担当教師の方々の姿に、あらためて頭が下がった。もし発言の整理の仕方に不適切な点があるとしたら、それは稿者の力不足によるものであり、平に御海容を願うと同時に、内容に関する訂正を行っていく所存である。また、稿者として最大の不満足の一つとして、今回の調査では、授業を受講している学生たちの声を直接掬い上げることができなかった点が挙げられる。項目⑩において、教員の目に映った彼らの反応については触れたが、受講者たちが実際に何を考えながら授業に臨んでいるのか、そして教師たちの思いはどれほど伝わっているのか等、その実態の把握は全て今後の課題とするほかない。

さて、次に、これまでで明らかになった現状を踏まえ、台湾の大学の「日本古典文学」教育が抱える課題についてまとめてみよう。まず教育環境をめぐる問題であるが、第2節で述べたように、6年前と比べると、高等教育機関での日本語学習者数は 59.3%、実数としては+44,656 人と、確かに増加している。しかし、このうちで日本語専攻者の伸びは+4,410 人に止まり³⁰、また調査票の回収状況を考慮すれば³¹、学習者の実質増加も、もっと低い可能性があると考えられる。のみならず、日本語専攻学科において「日本古典文学」の授業が開講される場所は減ってきており、さらに必修科目としているのも台湾大学を残すのみとなっていることから、台湾の大学で「日本古典文学」を学ぶ学生は減少傾向にあると見られ、その流れは、少子化の影響も考えれば今後も大きく持ち直すとは思えない³²。

30 第2節で見たとおり、2009年度における高等教育機関の学習者 119,898 人中で、日本語専攻の学生はその 15.4%の 18,505 人だが、さらに、2003年度の高等教育機関の学習者 75,242 人中、主専攻者の人数を交流協会のホームページで確認すると、その 18.7%の 14,095 人であり、6年間で 4,410 人の増加となる。http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_graphics.nsf/0/b1a037be4b59ef64492570920016b672/\$FILE/honbun.pdf の 8 頁を参照。

31 高等教育機関の場合、2009年度の回収率 100%に対して、2003年度は回収率 90.6%であったという。上記の交流協会ホームページの報告5頁を参照。

32 本稿の基となった、2011年6月19日に東海大学で行われたシンポジウム「日本文学教育在台湾—一實施現狀與面臨的課題」での発表のあと、2011年度の下学期(2012年2月以降)から、静宜大学と慈濟大学でも、大学院で「日本古典文学」に関する授業が開かれることになったとの情報に接した。本稿

では、我々はこれから高等教育機関(以外に、その教育の担い手は見出しにくいだろう)において「日本古典文学」をどのように扱っていけばよいのだろうか。例えば、必ずしも「文学」テキストの読解に結びつかない「文化」に関する教学については、今後とも学生からの一定のニーズを期待できるであろう。ところで、「古典」とは、何を「古典」と認定するか、という精神活動をも含めて、「文化」そのものである。所謂カノンとしての「古典」が、近代国家の成立と軌を一にして整備されていったものであることが指摘されて久しい。けれども、かといって、その個々の作品は近代になってから忽然と生み出されたものでもない。また(おそらく本特集が前提としているであろう)近代概念としての「文学」という観点から見た場合、所謂「古典」テキストには、それに馴染まないものも含まれる一方、近代以前において、それらの文化現象が歴史の中で一定の価値を持つと思われてきたことも否定できない。「古典」を、かかる歴史性を有した総体的価値体系だとすれば、その考察は、本来「日本」の「文化」を対象化する上で避けては通れないものであるはずだ。文化研究の立場から「日本文学」を捉えようとする際、カノン批判の俎上に載せられるのは、「近代文学」以上にむしろ「古典文学」であるわけだが³³、学習者たちが幼少時から様々な中国文学・文化に接する機会に恵まれ、かつ、担当教師も多くが日本と中国の比較研究を専門にしている台湾の「日本古典文学」教育の環境は、対象を客体として捉えるために有利な条件を、日本国内でのそれ以上に兼ね備えている。のみならず、「日本近代」を植民地支配というかたちで引き被ることになった台湾だからこそ、そうした対象化は、研究や教育の場で積極的に行われる必要があるとも言えよう。カノンとしての所謂「日本古典文学」が、何を掬い上げ、何を排除することによって成立してきたかの究明を、「中国」や「台湾」というフィルターを通して行っていく作業には、当地の学生への教育効果はもちろん、日本における諸学問に対しても、将来にわたり種々の刺激を齎すことが期待できる³⁴。それが、「日本語教育の中」でどこまで可能かは暫く措くにせよ、少なくとも「日本」を扱う高等教育機関のカリキュラムにおいて、一定の位置を占めてしかるべきことは間違いなからう。

で扱った問題の範囲外であるが、大学部で「日本古典文学」を受講し、さらに大学院進学後も継続してそれを学ぶという学生が徐々にでも増えていけば、今後の状況に、また新たな変化が見られるようになるかもしれない。

33 ハルオ・シラネ、鈴木登美編『創造された古典—カノン形成・国民国家・日本文学』(新曜社、1999年)、品田悦一『万葉集の発明—国民国家と文化装置としての古典』(新曜社、2001年)等を参照。

34 こうした点については、かつて内田(2004)「外(国文学)としての日本文学」で述べたことがある。

最後に、かかる「文化」としての「古典」へのアクセスを試みるにあたり、〈「日本文学」教育〉をも相対化しうる二つの契機を確認したい。一つは、文法理解を含め言語的側面を重視した「古文」教育であり、もう一つは、現代日本語訳のほか、場合によっては中国語訳の使用をも視野に入れた「(日本)文学」教育である。これらは異なる方向性を持ちつつ、相互に補完し合う面をも有している。(政)や(台)での場合のように、科目や学期単位で「古典文法」学習を独立させるメリットとしては、「読解の授業で、文法にあまり時間を割かなくて済む」((政))との指摘もあり、傾聴に値する。但し、担当教師の専門が全て「文学」であるせいか、授業で扱われるテキストが「文学」作品に傾きがちな現状は、検討の余地があろう。漢文訓読や植民地時代の文献など、台湾の土地柄に見合った教材をも活用しつつ、日本語理解のための「古文」教育を心掛ければ、後で専攻者が、文学のみならず、言語や教育、歴史等を選択的に目指していく上で、必ずや効果が得られよう。稿者はここに、高等教育機関の「日本語」専攻における、「文学」に偏らない「古文」学習の一定量の必修化を提言したい。これは、学習者が「日本語」とはいかなる言語かを歴史的観点から理解するために、また、現在も日本語非専攻者の割合が増えつつある中、学習者に更なる専門性の自覚を促すために、その意義を「日本語教育」の領域において十分に検討する必要があるものと思われる。また一方で、「古典」に顕著な「言葉の壁」をむしろ逆手に取り、翻訳版の積極的利用を導入するなら、敢えて「日本語」学習と切り離れた「日本古典文学」教育を、日本語学習者は勿論、大量の非学習者にまで開いていけるのではないか。多様な専門領域からの発言者が増えれば、「日本古典文学」をめぐる議論も、いっそう活発化していくであろう。必ずしも、最初から原文読解ありきではなく、こうした二つの基本路線を統合していく方向で、今後の台湾における「日本古典文学」教育の進むべき道を考えてはどうか。以上の問題提起をもって、当面の結論に代えることとする³⁵。

(Uchida Yasushi 淡江大學日本語文學系)

35 本稿は「台湾の大学における「日本古典文学」教育の現状と課題」(『東海大學日本語文學系學術研討會「日本文學教育在台灣—實施現狀與面臨的課題」會議論文集』、2011年6月)を加筆修正したものである。

参考文献

- 井上敬子(1997)「外国人への古典指導」、『國文學 解釈と鑑賞』794号、至文堂、1997年7月
- 内田康(2004)「外(国文学)としての日本文学」、『アジア遊学』第69号、勉誠出版、2004年11月
- 財団法人交流協会(2010)『2009年度 台湾における日本語教育事情調査報告書』、2010年8月
- 中村祥子・頼振南・張蓉蓓・楊錦昌(2010)「日本語の理解者から日本語の生成者へ」、『2010世界日本語教育大會【論文集・予稿集】』、大新書局、2010年7月
- 楊錦昌(2004)「日本古典文学教育の可能性—外国文学、外国語文学としての試み」、『アジア遊学』第69号、勉誠出版、2004年11月
- 楊錦昌・林文瑛(2010)「《日本古典文學》教學中的跨文化(交流)實踐」、『2009年跨領域日本研究論文集』、興國管理學院應用日語學系、2010年7月